－所蔵作品紹介－

一木　万寿三　ICHIKI Masumi

晩夏

ばんか

作品データはこちら

描かれているのは庭の一角であろう。陽射しは強く、少女は半袖のブラウス姿であり、植物もうっそうと茂っている。しかしよく見るとひまわりの花はしおれ、葉は黄ばんだり赤く色付き始めている。夏の終わりのころ、暑さのなかにも秋の気配がしのびよってくるひと時である。

この作品は、昭和初期のリアリズムの特色をよく示している。それは安井曽太郎や前田寛治の流れにある傾向で、おおまかにいえば、西洋の油彩画のみならず日本美術の伝統にも学びながら、同時代の生活感情を生き生きと表現する、というものであった。一木作品の大きな魅力がそこにあるのはこれまでも何度も指摘されてきたことであり、間違いないことである。

ただ、付け加えたいのは、この作品には別の要素もあるのではないかということである。

確かに明るい色彩、流動感のあるタッチ、対象を変形して描写することなどは、安井に代表される「日本的リアリズム」の特色である。その目指すところをひとことでいえば「明快さ」だろう。しかし、少女の背後に生い茂る植物の描写には、そうした明快さにおさまりきれない要素があるように思えてならない。このうごめくような形態の描写と、紅がかった赤い色はまがまがしいとさえ言える。ここににじみ出ているのは、ひょっとしたら近代のリアリズム（レアリスム）の祖・クールベが描くことを拒絶した天使のいる領域、つまり眼に見えない何かのある領域ではないか。

こう述べては、眼に見える世界のみを表現するという近代のリアリズムの本義に矛盾していよう。が、むしろ、日本人画家の感性はリアリズムを目指しながらも、眼に見えない領域を完全に切り捨てられなかったのかも知れないと、考えることもできるのではないだろうか。それがこの場合、植物にも霊的なものを認めるアニミズム的世界観のなごりかどうかは、今のところ判断を保留しなければならないが。

一木万寿三は1903（明治36）年、滝川村（現・滝川市）に生まれ、戦前は東京に住み帝展や一水会展に出品。戦中に滝川に疎開し、1960（昭和35）年から亡くなる1981（昭和56）年までは札幌に住んで、全道展の創立会員・一水会会員などとして活動した。1982年には滝川市中央公民館で、また1992年には札幌芸術の森美術館で回顧展がひらかれている。

旭川美術館だより「氷華」No.37（1996.３発行）「収蔵作品から」より